ISSN 2186-7445

Waseda Practical Studies in Japanese Language Education

早稲田からのアクション

早稲田日本語教育実践研究

2012　刊行記念号

常州大学图书馆
藏书章

［特集］
教室中心主義からの解放

早稲田大学日本語教育研究センター
Center for Japanese Language, Waseda University

編集後記

日本語教育学は、未だひとつの「学問」として十分に認知されていません。外国語／第二言語としての日本語の教育、学習、習得などを包括する学術領域として確立するため、本誌を通じて多様な研究の成果が広く永く発信されることを期待しています。（黒田）

いよいよ日本語教育研究センターの紀要が発刊されました。本誌を「私たちの紀要」と捉え、多様な実践研究を発信する場として育てていきたいと思います。また、本誌を通じて様々な実践者の協働が生まれ、センターがひとつの実践研究共同体となっていくことを願っています。（古賀）

社会・教育・教室での、わたしたちの小さな思い・気づき・怒りなどが、大きな確固とした日本語教育実践研究として実を結び、広く社会へ発信され、その発信がわたしたちの生きる場をよりよいものにしてゆく、そんな小さくて大きい実践研究を志したいと思っています。（武）

2012年、日本語教育研究センターに新たな紀要が誕生した。その名も『早稲田日本語教育実践研究』。早稲田の日本語教育がこれまで以上に飛躍するための研究の土壌として、この紀要が大いに活用されることを願ってやみません。（中山）

何のために実践研究をするか。それは結局、他の日本語教師……だけではなく、学習者も含め日本語教育／学習に関わる人々と自身の実践を共有することによって、日本語教育実践をより豊かな営みにしていくためだと思っています。そういう実践を共有する場の一つとしてこの紀要を創りました。この紀要の存在自体が実践研究の一つのあり方です。（古屋）

日々の教育実践について語り合える場が1つでも増えればという思いが、かねてからありました。人が集まる場所に語り合いが生まれ、それが従来の枠組みを超えた新たな教育実践に結びついていくという、創造・連携・協働のための役割の一端を、本誌が担うことができればと切に願っています。（守谷）

刊行記念号編集委員

黒田　史彦
古賀　和恵
武　　一美
中山　英治
古屋　憲章
守谷　智美

川上　郁雄
舘岡　洋子

早稲田日本語教育実践研究　刊行記念号

Waseda Practical Studies in Japanese Language Education 2012

2012年2月3日

ISSN 2186-7445

無断転載を禁じます

編集兼発行者　早稲田大学日本語教育研究センター所長
細川英雄

発行　早稲田大学日本語教育研究センター

編集委員会連絡先　〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-7-14
電話　03-5273-3142
FAX　03-3203-7672
E-mail　cjl-journal@list.waseda.jp
URL　http://www.waseda.jp/cjl/html/publish.html

巻頭言

日本語教育学の未来を拓く実践研究の翼として
―『早稲田日本語教育実践研究』刊行記念号によせて―

細川　英雄
早稲田大学日本語教育研究センター所長

早稲田大学日本語教育研究センターは，2011年4月より全学研究教育センターとして独立した。これを機に2012年度よりその教育研究活動の発信母体として紀要『早稲田日本語教育実践研究』を発行することとなった。本号は，その刊行を記念する刊行記念号である。

実践研究とは，言うまでもなく教育の現場に即した実践に基づくものである。

多くの日本語教師は，自らの教育実践を設計・実施し，その検討・振り返りを経て，日々の実践を改善していく。この教育実践を考えるための循環サイクルこそが実践研究と呼ばれるものである。このとき，その実践の理念とデザイン，そして教育内容そのものへの徹底的な検討や振り返りこそが重要となる。さらに，そうした検討や振り返りの際には，他者への発信及び協働が不可欠となる。実践研究は，学習者との協働であるとともに，教師間の協働でもあるといえよう。

「わたしはどのような教育実践をめざすのか」という問いを持った教師一人ひとりが，その問いのもとに実行する教育実践のサイクルこそ実践研究だとすると，それに基づいて記述されたものは，実践の中身そのものを問い直す思想を指すことになる。その意味で，実践研究は，教育実践の中身を鋭く問いつつ，日本語教育のあり方それ自体を革新する，大きな翼とならなければならない。この翼をささえるものは，私たちの職場であり居場所であるところの教育実践空間から出発する，新しい意識のエネルギーだろう。

この紀要が，早稲田からのアクションとして，こうした実践研究の本来的な役割を果たしつつ，早稲田大学日本語教育研究センターからの教育研究活動の発信母体として機能し，新しい日本語教育学の未来を拓くことを願ってやまない。

早稲田日本語教育実践研究

Contents

2012　刊行記念号

日本語教育学の未来を拓く実践研究へ　細川英雄 _____ 1
―『早稲田日本語教育実践研究』刊行記念号によせて―

特集　教室中心主義からの解放

緒言　特集企画者一同 _____ 4

《基幹論文》：日本語センターにおける留学生支援システムの展開と今後の構想

留学生支援システムの構図 _____ 7
A Framework of the Support System for International Students
黒田史彦

留学生支援システムにおける日本語チュートリアルの実施概要とその意義 _____ 25
― 2011 年度 5 月から 8 月の実施記録を資料として―
The Overview and its Significance of Japanese Tutorial in the Support System for International Students:
through Reports from May to August in 2011
中山英治

留学生支援システムにおける行動指針とスタッフ・ディベロプメントに関する検討 _____ 39
The conduct guidelines and staff development in the Support System for International Students
守谷智美・尾関史・坂田麗子・田中敦子・福池秋水・小高葉子

《寄稿論文》：教室実践の新展開

〈「読み」の新展開〉 _____ 55

テキストを媒介とした学習コミュニティの生成 _____ 57
―二重の対話の場としての教室―
The creation of a learning community mediated by texts:
The classroom as a place of two layers of dialogue
舘岡洋子

「自由読書」―「読み」を個人のものとするために― _____ 71
Free Reading:
The class which the students have the leadership in reading
熊田道子

クラス担当者の実践観、教室観、教師観はどのように変容したか _____ 85
―5 学期にわたる「イベント企画プロジェクト」のリフレクションから―
How the Teacher Have Transformed Their Belief of the Value of Education Practice,Classroom and Teacher:
Reflection of "Let's produce an event" for Five Semesters
古屋憲章・古賀和恵・三代純平

ひとともものをつくる _____ 107
―演劇作品作りの現場としての日本語の教室から―
Collaboration in Creative Works:
Process of Drama Production in a Japanese Class
中山由佳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本語教育における映画の一般的な教材価値と社会参画を支援できる教材価値 _____ 119
—『男はつらいよ』を資料として—
General teaching material value of the movie and the teaching material value that can support social participation in Japanese-language education:
Based on the analysis of the Japanese movie 'Otoko wa Tsurai yo'
中山英治

初級日本語クラスにおける教師間シナジー _____ 139
— Course N@vi を活用した「日本語かきこ」の実践—
The Effects of Inter-teacher Synergy in Japanese Class for Beginners:
The Practice of "Nihongo Kakiko" using Course N@vi
川名恭子・小西玲子・齋藤智美・坂田麗子・佐藤貴仁
田所直子・田中敦子・水上弘子・宮武かおり・渡部みなほ

エッセイ＆インタビュー

《センター最前線》

「俳句を作る・短歌を詠む 7-8」を教えて　浜畑祐子 _____ 154

開発教育を取り入れた日本語クラス実践　河内千春 _____ 156

問題発見解決能力を伸ばすことを目指した日本語の授業　宮﨑七湖 _____ 158

〈「活動型」担当者からの声〉 _____ 161

活動型クラスにおける教師の楽しさ _____ 162
—「うふふ」と「もやもや」の狭間で—
李ジョン美・遠藤ゆう子・福島恵美子・福村真紀子

活動型クラスにおける担当者と学習者のズレについて _____ 168
鴻野豊子・眞鍋雅子・森元桂子

教師同士による協働リフレクションの試み _____ 174
—異なる授業担当者間の対話と気づき—
今井なをみ・佐藤貴仁・古川明子・村上まさみ

《古往今来》

多民族国家に住んで考えたこと　小林敦子 _____ 184
—シンガポールで見た二言語併用政策とアイデンティティ—

《日々こもごも》

思わず何かひとこと言いたくなる仕掛け　齋藤智美 _____ 192
—“２ちゃんねる”で教室をくすぐる—

学習者がより積極的に発言できるような授業作り　沈佳琦 _____ 195
—補助教材使用を通して—

「実践研究」をスキルトレーニングで終わらせない工夫　小林ミナ _____ 197
—センターと日研の連携による日本語教育システム構築を目指して—

諸規程／論文執筆要領 _____ 201
お知らせ _____ 212
執筆者紹介 _____ 216

特集緒言

特集：教室中心主義からの解放

特集企画者一同

緒言

ことばの学習・教育の分野において，「教育中心から学び中心へ」「教師中心から学習者中心へ」といったパラダイム・シフトが起こって久しい。こういった考え方は，現在では，もはや常識として受けとめられている感さえある。しかし，実際には，「学び中心」「学習者中心」を謳いながらも，その理念を十分に体現できていない実践例も少なくない。その原因のひとつとして考えられるのが，実践の場を教室の中だけに限定していることが挙げられる。教室は，「学び中心」「学習者中心」といった理念を実現させる場としてはあまりに窮屈である。まず，教室は，授業時間という枠で時間的に制限されている。そして，教室においては，授業内容や学習方法があらかじめ定められていることが多い。更に，学習者と教師という関係が固定しがちである。

近年，「学習者主体の教室空間を創造せよ」「教室の中にある教師と学習者の壁を取り払え」「教室内に（留学生）コミュニティを作り出せ」といった理念に基づく教室実践がいくつか見られるようになった。しかし，これらの実践も，やはり「実践は教室で行われなければならない」という教室中心主義に囚われている。学習者が真に主体性を発揮し，有意義なコミュニティを形成すべきは，教師と学習者という役割が定着している教室の中ではない。このような教室中心主義から日本語学習者を解放していくためには，学習者の教室観・学習観に働きかけようとするだけではなく，留学生の教育や支援に関わる者の教育観・教師観・授業観にも大きな変革を求めなければならない。

上述した問題意識にもとづき，私たちは，「教室中心主義からの解放」という特集を企画し，原稿を依頼した。その結果，教室中心主義を手掛かりに留学生の教育や支援に関わる者の教育観，教師観，授業観を問い直す九つの論考が集まった。

基幹論文とした三編は，いずれも2011年度に早稲田大学日本語教育研究センターに開設された留学生支援システムに関する論考である。

黒田論文は，留学生支援システムの理念や全体像を見渡す論考である。留学生支援システムは，早稲田大学に在籍するすべての留学生が日本語学習リソースにセルフ・アクセスすることにより，自律的な日本語学習を実現できる学習環境を創出し，実り多い留学生活を可能にする大学空間を創造することを目指している。留学生支援システムという構想において，教室は，学習者がアクセスできる様々な日本語学習リソースの一つに過ぎず，中心的な位置を占めていない。つまり，留学生支援システムは，教室をも含めたより広い「学びの場」を留学生自らが主体的にデザインするという意味において，教室中心主義からの解放を志向するシステムである。

中山論文は，上述した留学生支援システムの支援拠点である日本語チュートリアル（現在は，わせだ日本語サポートに改称）に関する論考である。日本語チュートリアルでは，大学院生の支援スタッフによるナビゲーター，アドバイザー，そして，学習リソースとしての支援活動を行うピア・

サポートが実施された。いわゆる日本語の教室の外で行われる日本語チュートリアルは，それに参加する学習者，支援スタッフの双方が日本語の教室を相対化する可能性を持った活動であると言えよう。

守谷・尾関・坂田・田中・福池・小高論文は，上述した日本語チュートリアルを担う支援スタッフの行動指針とその育成に関する論考である。本論文では，支援の際のスタッフの行動指針の拠り所となる理論的背景を述べるとともに，スタッフ・ディベロプメントの一環として行われた事例検討会の報告を通して，教員と支援スタッフによる留学生支援のためのコミュニティの創出が提案されている。留学生支援コミュニティの創出は，学習者，支援スタッフのみならず，日本語教育に携わる教員も日本語の教室を相対化する可能性を持つと言えよう。

寄稿論文とした六編は，いずれも，早稲田大学日本語教育研究センターで行われている日本語教育実践を対象とする実践研究である。

舘岡論文と熊田論文は，「『読み』の新展開」というテーマのもと，教室における「読み」の意味を捉え直した実践研究である。（特集テーマにおける両論文の位置づけに関しては，「『読み』の新展開」のページを参照のこと。）

古屋・古賀・三代論文は，「イベント企画プロジェクト」という実践における教師の実践観，教室観，教師観が変容する過程を詳細に記述した実践研究である。本論文では，二つの異なるあり方によるリフレクション，すなわち実践の現状を把握するリフレクションと実践の構造を把握するリフレクションを行き来することが，筆者らの実践観，教室観，教師観の変容を支えていたことが示唆されている。多くの教師が，自身が教室中心主義に陥っていることを意識していない。なぜなら，多くの教師にとって，教室が日本語教育の中心であることは，意識するまでもない当然の前提であるからである。本論文において提案されている二つの異なるあり方によるリフレクションを行き来することは，教師が自身の教室中心主義に気づき，日本語教育実践を多様な観点から捉えられるようになるための一つの手段となる。

中山由佳論文は，「演劇作品制作」という実践を対象とする実践研究である。「演劇作品制作」という実践では，演劇作品の公演を媒介に，教室から社会に向け，何らかのメッセージを発信することが意図されている。多くの日本語教育実践は，教室の中だけで全ての活動が完結するように設定されていることが多く，教室を取り巻く社会は，あまり省みられない。一方，「演劇作品制作」は，社会に向け発信することを前提に活動がデザインされているという点で，教室中心主義から解放された実践であると言える。

中山英治論文は，「日本語教育教材考：映画『男はつらいよ』の日本語と日本文化」という実践を対象とする実践研究である。「日本語教育教材考」という実践は，日本語教育に関心を持つ外国人留学生と日本人学生の混在型授業クラスにおいて，映画『男はつらいよ』の日本語教育教材としての価値を考察するという内容である。従来の教材論においては，教材の中身に関し，論じられることが多かった。しかし，本論文で紹介されている実践においては，「学習者と教材」の関係性，「教師と教材」の関係性，「教材化のプロセス」という観点から，映画『男はつらいよ』の教材としての価値が考察されている。このような教材を教室の中だけではなく，より広い文脈において捉えようとする姿勢は，教室のみを見ようとするのではなく，教室をより広い社会的な文脈において捉えようとする姿勢と相通ずる。教材価値論は，教師が教室中心主義から解放されるための一手段とな

る可能性を持っている。

川名・小西・齋藤・坂田・佐藤・田所・田中・水上・宮武・渡部論文は，早稲田大学日本語教育研究センターの初級前半クラスで行われた「日本語かきこ」活動（学生が自分に関することを電子掲示板に日本語で書き込む活動）における教師の取り組みを対象とする実践研究である。「日本語かきこ」活動は，同じレベルの九つのクラスで一斉に実施された。「日本語かきこ」活動を媒介に，教師間の連携が促進され，教師間の連携が互いの実践を改善するという相乗作用＝教師間シナジーを生んだ。「日本語かきこ」活動は，教師が教室で学習者に教授するタイプの実践ではない。そのため，開始当初，担当教師たちに様々な戸惑いが生じた。しかし，教師間の連携をとおして，戸惑いが解消され，最終的には教師間シナジーの形成へとつながった。このような教師間の連携から教師間シナジー形成へと至るプロセスは，教師が教室中心主義から解放されるために必要な環境に関し，示唆を与える。

はじめに述べたように，教室中心主義から，日本語学習者を解放していくためには，留学生の教育や支援に関わる者の教育観・教師観・授業観の変革が不可欠である。本特集が読者諸賢の教育観・教師観・授業観を問い直す一つの機会となれば幸いである。

基幹論文　日本語センターにおける留学生支援システムの展開と今後の構想

留学生支援システムの構図

A Framework of the Support System for International Students

黒田　史彦

要旨

2011年，早稲田大学日本語教育研究センターは，大学院日本語教育研究科と連携しながら，留学生支援ネットワークの総体である「留学生支援システム」を設置した。

留学生支援システムでは，早稲田大学に在籍するすべての留学生が日本語学習リソースにセルフ・アクセスすることにより，自律的な日本語学習を実現できる個人的学習環境の創出を目指している。同時に，すべての留学生が留学生サポートにセルフ・アクセスすることにより，自己実現が可能な個人的修学環境を作り出すことを目標として掲げている。

留学生支援システムの支援拠点として開設した「わせだ日本語サポート」では，日本語教育学を専攻する大学院生が支援スタッフとして待機し，ナビゲーター，アドバイザー，そして，日本語学習リソースとしての役割を果たしながら支援を行うピア・サポートを実施している。

留学生支援システムは，教室の外に留学生のための新しい学びの場を拓くことに挑戦している。さらに，この取り組みを足掛かりとして，自分自身のことを十全に分析し，主体的な学びを継続的に成す姿勢を備えた人間，つまり，生涯に渡って学ぶ姿勢を備えた人間を育む大学空間の創造を見据えている。

キーワード：留学生支援システム，わせだ日本語サポート，セルフ・アクセス，
個人的学習環境，個人的修学環境

1. はじめに

日本政府による「留学生30万人計画」の策定を受け，国内の大学をはじめとした各教育機関における留学生は着実に増加し，その多様化も飛躍的に進行している。しかし，急激な留学生の増加と多様化の速度は教育機関の予想を大きく超えるものであり，受け入れ体制の整備が十分に整っているとは言えない。従来は，日本語の教室や授業を増設することによって，留学生の受け皿を確保しようという努力が一般的に行われてきた。しかし，様々な背景やニーズを持つ留学生すべてに満足のいくカリキュラム運営は年々困難となり，もはやこの対処方法は限界に近づいていると言わざるを得ない。

このような問題を抱えている教育機関にあっては，問題解決に向けた現実的な次の一手を早急に打たなければならない。専門教育も事務手続きもすべて英語で済ますことができるようなプログラムを大学内に設置すればよいという主張もあるが，留学生は常に学内に留まっている訳ではなく，学外に出て一市民として生活するに際しては，日本語を使用する必要に迫られるのが実状である。したがって，英語に依存するプログラムを設置すれば留学生が抱える問題を容易に解決できるとは到底考えられない。

本稿では，教室だけに頼る日本語学習・日本語教育ではなく，英語による教育の享受・提供でも

ない，第三の可能性を探る。つまり，大学において日本語を学ぼうとする留学生の目を教室の外にも向けさせ，個々の留学生に相応しい学習環境と修学環境を実現するための理念と実践について論を展開し，従来型の学習・教育に対する固定観念の転換が大学全体に必要であることを述べる。

次節以降においては，教室や授業だけに囚われない自律的な日本語学習に対する支援を基軸としながら，実り多い留学生活を実現できる大学空間の創造を目指している早稲田大学日本語教育研究センターの取り組みについて論じる。特に，学習支援および修学支援の役割を担う支援機構である「留学生支援システム」と，その要となる「わせだ日本語サポート」について，設置背景や理念，運営方針，そして実践状況について詳しく述べていく。

2. 留学生支援システム

2011年現在，早稲田大学には約4000人の留学生が在籍しているが，2020年までには留学生を8000人に倍増しようという計画が動き出しており，毎年，留学生数は確実に増加している。他大学等の教育機関と同様に，早稲田大学においても留学生の受け皿として日本語科目（授業）を増設しており，約200名の授業担当者（日本語教師）が週あたり750コマ以上の日本語科目を開設している。しかし，今後も増加する予定の留学生を受け入れるために必要な授業担当者や教室の確保は，既に極限状態に近づいている。また，日本語科目の数や種類が増えれば増えるほど，履修計画を立てたり科目登録手続きを行なう際に支障をきたす留学生も増える。授業の内容，開設の曜日，時間，場所（キャンパス）などの都合で，日本語科目を受講したくてもできない留学生の数も無視できないほど増えている。さらに，多様な背景やニーズを持つ留学生の中には，一斉授業という形態の語学クラスに馴染めない者も少なくない。日本語で苦労する留学生が増える中，大学内外の留学生活における問題を抱え込む留学生も増加している。

もちろん，大学内には日本語科目以外の日本語学習リソースも準備されており，留学生向けの留学生サポートも整備されつつある。たとえば，日本語教育研究センターでは，随分以前より日本語チューター制度を設けている。しかしながら，このような日本語学習リソースや留学生サポートについては，留学生からのニーズは多分にあるものの，十分に活用されているとは言えない状況であった。これは，日本語教育研究センターや留学生受け入れ担当部署である留学センター，学生間の国際交流担当部署である国際コミュニティセンターなどが提供する学習リソースや留学生サポートに関する情報が，部署ごとに散発的に発信されるに留まっていることに起因する。つまり，有益な情報であっても，一箇所に集約されることがないため，その情報を必要としている留学生の元にまで効率的に到達していなかったのだと考えられる。

以上のような日本語学習上の問題および留学生活上の問題を包括的に解決し，留学生の学習環境と修学環境を改善していくためには，全学的な留学生支援機構が必要となる。このような発想から日本語教育研究センターに設置されたのが，「留学生支援システム」である[1]。留学生支援システムの理念は，個々の留学生が自分にとって必要な日本語学習リソースや留学生サポートに，安心してセルフ・アクセスできるような大学空間の創造を目指すことである。日本語学習リソースへのセルフ・アクセスが可能であるということは，留学生が自らに必要な日本語を，都合のよい時に，最適な方法で，主体性を発揮して計画的に学ぶこと，すなわち，自律的な日本語学習を実現することである。また，留学生サポートへのセルフ・アクセスが可能であるということは，留学生が自分ら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しく生きていくための修学環境を自らの働きかけによって作り出すこと，すなわち，自己実現のための留学生活を築き上げていくことである。自律的な日本語学習を実現できる学習環境と留学生活における自己実現を可能とする修学環境の創出を理念に掲げ，あらゆる日本語学習リソースや留学生サポートと個々の留学生との間を有機的に取り結ぶ支援ネットワークの総体が留学生支援システムである。

日本語教育研究センターでは，留学生支援システム構築の一環として「わせだ日本語サポート」を開設し，新しい留学生支援活動の拠点としている。わせだ日本語サポートでは，大学院日本語教育研究科と手を組んで大学院生を支援スタッフとして配置し，ピア・サポートを実施している。最初に，留学生支援システムの主要構成と機能について，概念図を示しながら解説していきたい。

2.1. 日本語学習リソースと留学生サポート

留学生自身による主体的なセルフ・アクセスを可能にする大学空間を作り出し，日本語学習と留学生活を多面的・総合的に支援する使命を持つ留学生支援システムでは，まず，留学生が必要とする日本語学習リソースや留学生サポートに関する情報を収集しなければならない。

日本語学習リソースとは，留学生の日本語学習に結びつき得るあらゆるヒト・モノのことである。早稲田大学にあっては，わせだ日本語サポートとその支援スタッフ，日本語学習の計画を立てたり振り返りや自己評価を行ったりする際に利用可能な自己管理ツール（例：学習計画シート），日本語教師をはじめとした日本語教育に携わる教職員，多種多様な日本語科目，日本語チューター制度，「にほんご わせだの森」（池上 2009），図書館や学生読書室の蔵書と日本語学習材，学生用パソコンルーム，アカデミックな文章の作成を支援するライティングセンター，国際コミュニティセンター，国際交流サークル，留学生の友人・級友・先輩などにあたる（日本人に限らない）学生などが挙げられる。学内だけではなく，学外地域やWEB上にも数多くの日本語学習リソースが存在している。

留学生サポートとは，留学生活の質的向上に結びつき得るあらゆるヒト・モノのことであり，日本語学習リソースをも包含するより広い概念である。上述のわせだ日本語サポートや支援スタッフなどの日本語学習リソースに加えて，留学生支援に関わる教職員，留学センター，留学生の就職活動を支援するキャリアセンター，学生寮を管轄するレジデンスセンター，心身の健康を管理する保健センターと学生相談室の各種サービスなどが挙げられる。その他，学外地域やWEB上には，自治体などによる留学生サポートも多い。

図1は，留学生のための日本語学習リソースと留学生サポートを概念的に示したものである。一番外側の四角い枠は，或る留学生が物理的に，または，WEB上でアクセス可能な最大範囲である。丸印が日本語学習リソース（R）ないし留学生サポート（S）を表している。実線の丸印は，その存在や役割を留学生に認識されているものであり，破線の丸印は，その存在や機能を留学生に知られていないものである。いかに優れた学習リソースや留学生サポートであっても，留学生に認知されていないのでは，存在していないも同然である。大学内外およびWEB上に，どのような日本語学習リソースや留学生サポートがあるのかという情報を広範に収集し，適切に分類・整理した上で留学生に提供していくことが留学生支援システムの最初の任務である。

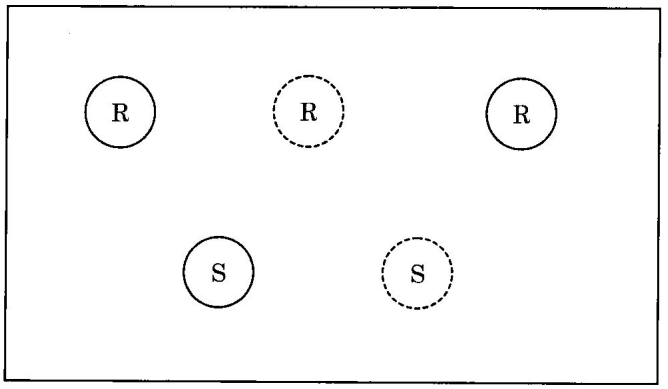

図1　日本語学習リソースと留学生サポート

2.2. セルフ・アクセス

セルフ・アクセスとは，留学生が主体的に日本語学習リソースや留学生サポートを活用することである。学習リソースや留学生サポートを利用するか否か，いつからいつまで，どのように利用するのかについては，留学生自らの判断に基づいて決定されなければならない。周囲の人間が留学生を無理にアクセスさせることはできても，それは健全なセルフ・アクセスとは呼べない。決定権は，すべて留学生が持っている。

留学生支援システムでは，留学生が主体的に日本語学習リソースにセルフ・アクセスすることを，「学び」の第一歩と考える。図2（a）では，留学生（フェイスマーク）が既知のリソースにセルフ・アクセスして「学び」を実行していることが，矢印を使って概念的に示されている。

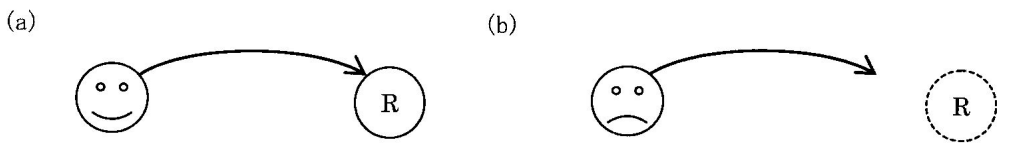

図2　セルフ・アクセス

セルフ・アクセスを可能にするためには，留学生のニーズに即した日本語学習リソースや留学生サポートを留学生に紹介し，十分に理解してもらうことから取り掛からなくてはならない。もし大学内外やWEB上に留学生のニーズに応えられる学習リソースや留学生サポートが存在していたとしても，留学生がその存在を知らなければ，アクセスすることは叶わない。図2（b）では，留学生が日本語学習リソースの存在について認識していないために，セルフ・アクセスできない様子，つまり，学びが形成されない状況が図示されている。留学生支援システムは，留学生による日本語学習リソースと留学生サポートへのアクセス可能性を確実なものとするために，アクセス経路の確保に努めている。アクセス可能性が高まるということは，とりもなおさず，留学生にとっての学習環境と修学環境が充実するということである。

2.3. 支援ネットワーク

留学生が日本語学習リソースや留学生サポートに首尾よくセルフ・アクセスするためには，学習

リソースや留学生サポートの情報を収集・蓄積しておくだけでは不十分である。各リソース，各サポート間の連携を強化したり，必要のない重複を解消したり，足りない部分を補い合ったりするような調整をリソースやサポートの提供元に働きかける必要がある。あくまで留学生の立場から見て，無理・無駄のない支援ネットワークが形成されることが望ましい。

図3は，4つの日本語学習リソースが，結節点（四角形）を介してお互いに結びついている様子を，簡略的に表している。実際には，無数の学習リソースが相互に直結しており，より目の細かい網目状のネットワークを形成しているはずである。そして，日本語学習リソースと留学生サポートを結んだネット（網）で，問題や疑問を抱えて困っている留学生をすくい上げようと試みる仕組みが，留学生支援システムであるとも言える。

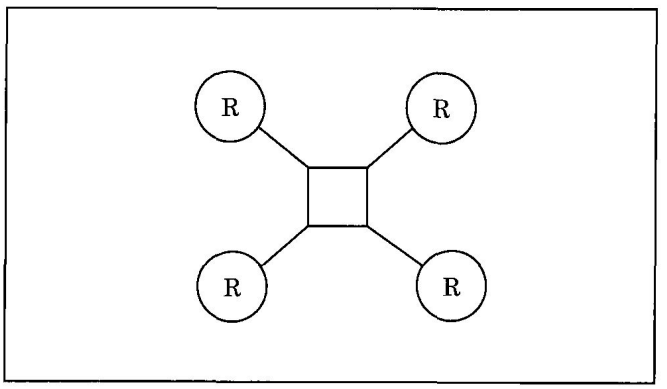

図3　支援ネットワーク

2.4. ポータル経由のセルフ・アクセス

数多くの日本語学習リソースと留学生サポートから構成される支援ネットワークの総体である留学生支援システムには，留学生が希望する学習リソースや留学生サポートに容易にセルフ・アクセスできるような仕掛けも必要である。つまり，支援ネットワークへの最初のアクセス・ポイントとなり得るポータル（入口）がなくてはならない。

ポータルとは，いわば旅行者向けのインフォメーションセンターのようなものである。旅行者は，必要な時にインフォメーションセンターを訪れ，自分が求めている情報を得ることができる。たとえば，旅行者が現代美術を鑑賞したい場合，どのような美術館がどこにあるのか，どんな美術品が展示されているのか，開館時間は何時から何時までか，入場料はいくらか，何か特別なイベントが催されていないか，その美術館に行くにはどの交通機関を使うのが最も便利なのか，一か所だけではなく複数の美術館を訪れた方が有意義なのか，といった有益な情報をまとめて得ることができるのがインフォメーションセンターである。

同様に，何らかの支援を求める留学生は，最初にポータルに立ち寄って，自分に利用可能な日本語学習リソースや留学生サポートに関する情報を一括して入手し，今の自分に最も相応しいと思われる学習リソースや留学生サポートを選んで自らアクセスする。

図4は，留学生がまずポータル（P）にセルフ・アクセスし，その後，日本語学習リソースと留学生サポートにセルフ・アクセスしている様子（放射状に広がる4つの矢印）を概念的に表してい

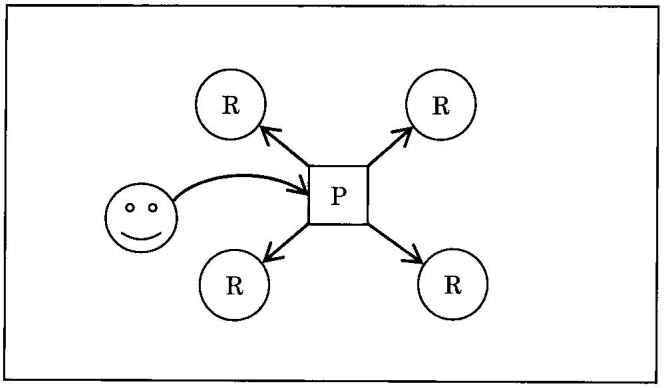

図4　ポータル経由のセルフ・アクセス

る。留学生は，最初にポータルにセルフ・アクセスし，あらかじめ張り巡らされたアクセス経路を辿ることにより，容易に学習リソースや留学生サポートに到達できる。

2.5. 個人的学習環境と個人的修学環境

日本語学習リソースや留学生サポートへセルフ・アクセスするための道筋が確立されたからといって，すべての学習リソースや留学生サポートが常に等しくアクセスされる訳ではない。セルフ・アクセスが留学生による主体的な活動である以上，いつ，どの学習リソースを使って学ぶのか，何回くらい，どのくらいの頻度で留学生サポートを利用するのか，といった判断は，すべて留学生本人に委ねられている。留学生は，今の自分にとって最も相応しい学習リソースと留学生サポートを見極め，セルフ・アクセスする権利を有している。もちろん，ある学習リソースや留学生サポートにはアクセスしない，あるいは，もう必要のなくなった場合にはアクセスをやめる，という決定も可能である。

このような一連の主体的営みによって，留学生は自分自身に相応しい大学空間，すなわち，自律的な日本語学習を実現できる学習環境と，自己実現を可能とする修学環境を作り出すことができる。自分だけのために主体的にデザインした学習環境を，「個人的学習環境」と呼ぶ。

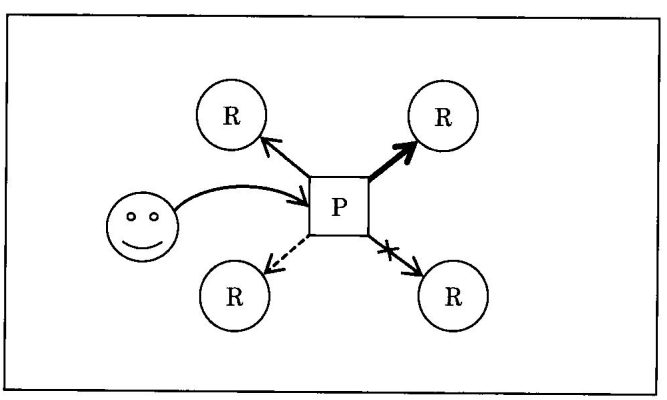

図5　個人的学習環境

図5の概念図では，留学生がポータルを経由してアクセス経路を通り，日本語学習リソースにセルフ・アクセスしている。注意すべきは，アクセスを表す矢印の描き方である。太い矢印は，留学生が学習リソースを頻繁に利用していることを表している。×印の付せられた矢印は，かつては利用していたが，現在は使わなくなっていることを表し，破線の矢印は，今はまだ利用していないものの，将来的に活用しようと計画されていることを表している。言うまでもないことだが，この図には描かれていないものの，まったくアクセスしない学習リソースも数多くある。

個人的学習環境は，留学生が自分だけの日本語学習環境をうまく作り上げたモデル例である。同様に，留学生が今の自分に最も相応しい留学生サポートを選択し，セルフ・アクセスを実行している場合は，自己実現のための理想的な「個人的修学環境」がデザインされたと言える。

このように，日本語学習リソースや留学生サポートをいかに計画的に，継続的に活用し，自己成長のための個人的学習環境や個人的修学環境を築き上げていくのかについて，留学生は，試行錯誤を繰り返しながら，十分に検討し，主体的に取り組んでいかなければならない。

2.6. 自律

今の自分にはどのような日本語が必要なのか，将来の自分は日本語とどのように付き合っていくのか，理想的な自分を実現していくためには，どのような個人的学習環境と個人的修学環境が必要なのか，留学生は常に考え，行動しなければならない。長・中・短期的な目標達成のために，いつ日本語学習リソースにセルフ・アクセスして学ぶべきか，どんな留学生サポートにセルフ・アクセスしてサービスを得るべきか，どのリソースとサポートを組み合わせるべきか，いかなる個人的学習環境と個人的修学環境を設計すべきか，検討すべきは多岐に渡る。

しかし，上述したように，セルフ・アクセスをするかしないかについての判断，あるいは，学習リソースや留学生サポートの取捨選択は，すべて留学生自身が最終的な決定を下すべきことである。個人的学習環境と個人的修学環境は，留学生が主体的にデザインしなければ実現しない。時に失敗することもあるだろうが，その失敗から学ぶことも大きい。むしろ，失敗を繰り返すことで，自分に相応しい学びと留学生活の在り方やその実現方法，自己管理の方法に対する理解が深まるとも言える。

このように，自分の現状や将来についてしっかり自己分析し，自己理解を深め，いかに自己実現を可能にしていくのか，どのような学びを形成していくのか，自分自身でよく検討し，自らの判断で行動計画を立てて実行し，折をみて自己検証し，継続的・計画的に自己成長に努めることが自律であり，自律的学習であると考える。そして，まず自分自身のことを主体的によく考えることが，自律／自律的学習へ向かう第一歩だと言える。もちろん，常に何か行動するだけではなく，「ひと休みして息抜きをする」「今は何もしない」という選択や，よく考えた上で「今の自分には講義形式で受け身型の授業が必要だ」という判断も，留学生活や学びに対する自己管理の一部であり，自律性の発現として尊重すべきものである。

2.7. ポータルを経由しないセルフ・アクセス

留学生たちが日本語学習リソースの利用を始めるに際しては，まずはポータルをくぐり，学習リソースに関する情報を得て十分に吟味し，自分に最適な学習リソースへセルフ・アクセスすることが多いだろう。学習の進捗状況に合わせて，新たな学習リソースを探すためにポータルを訪れるこ

とも予想される。しかし，或る時点における個人的学習環境を構築してしまえば，当然，ポータルへのアクセス回数は減る。

当然のことだが，ポータルの利用回数の減少が，即，留学生支援システムの衰退を意味する訳ではない。留学生が自らの学びについて主体的に考え，相応しい日本語学習リソースに計画的にセルフ・アクセスして学習に取り組むことが自律的な学習だと考えるのなら，何も毎回ポータルを経由してから学習リソースへアクセスする必要なはい。

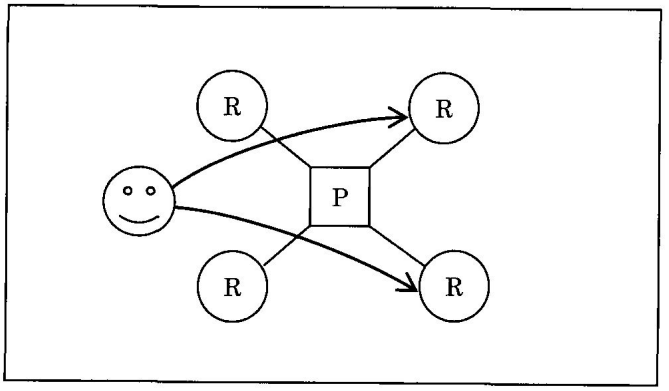

図6　ポータルを介さないセルフ・アクセス

図6は，留学生がポータルを経由することなく，学習リソースへ直接セルフ・アクセスしている様子を概念図化している。つまり，留学生は，学習リソースへアクセスするための既定の経路を辿るだけではなく，新たなアクセス経路を独自に確立したことになり，個人的学習環境をより整備し，自律的な学びを一歩前進させたとも言える。もちろん，この留学生が，次のステップの日本語学習について模索し，個人的学習環境を更新しようとする時には，再びポータルを訪れるかもしれない。その時に備えて，ポータルは常に開かれていなければならない。

上で述べたことは，日本語学習に関してだけではなく，留学生活全般についても当てはまることである。留学生が新たな個人的修学環境を作るために新規の留学生サポートを必要とする時に備えて，留学生サポートへの入口となるポータルは，いつでも確実にアクセス可能な状態になければならない。

3. わせだ日本語サポート

支援ネットワークの総体である留学生支援システムと留学生との最初の接点となるポータルが不可欠であることは既に確認した。このポータルは，早稲田大学においては「わせだ日本語サポート」という形で具現化されている[2]。問題や疑問を抱えた留学生が最初に訪れるポータルは，いつも決まった場所にあり，常に広く開かれ，誰でも躊躇なくアクセスできることが望ましい。わせだ日本語サポートも，留学生にとって，間口が広く，敷居が低い支援ポータルとしての運営を目指しつつ，体制を整備している途上である。

以下においては，わせだ日本語サポートでピア・サポートを実践している支援スタッフの役割について，特に，ナビゲーター，アドバイザー，そして，日本語学習リソースとしての役目について

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com